

## 『不思議の国のアリス』

ルイス・キャロル／著 トーベ・ヤンソン／絵  
村山 由佳／訳 メディアファクトリー  
(2006年)

懐中時計を片手に大慌てで走る白ウサギを追いかけて、アリスは深い穴に落っこちてしまいました。多くの人が一度は耳にしたことがある『不思議の国のアリス』。本書は『楽しいムーミン一家』の作者であるトーベ・ヤンソンが挿絵を手がけています。ヤンソンの描く不思議の国の住人たちは、みんなことなく静謐な雰囲気を漂わせています。テニエル作画の意志の強そうなアリスとも、ディズニー作のお転婆なアリスとも違う、優美なアリスを読んでみませんか。



## 『ウサギの天使が呼んでいる ほしがり探偵ユリオ』

青柳 碧人／著 東京創元社 (2017年)

上司とのトラブルで会社をやめた深町さくらは、兄ユリオの家に泊めてもらう代わりにユリオの仕事を手伝うことになった。ユリオは「ほしがり堂」というネットショッピングサイトを運営している。商品はユリオが節操なく方々から集めたがらくた（お宝）で、それを欲しい人に売っている。ユリオとさくらはお宝を集めに行く先々でなぜか事件に遭遇してしまう。身元不明のゾンビの死体やゴミ屋敷の秘密など、ほしがりの兄と苦労人の妹が数々の事件に巻き込まれる連作短編集。



## 『アリスのうさぎ』

斎藤 洋／著  
森泉 岳士／画 偕成社 (2016年)



まつしまあかり 松島朱里は、『不思議の国のアリス』が大好きで、自分の名前にアトリが入っているので、友達にもアリスと呼ばれて（呼ばせて）いる。去年の秋、鷺背山にハイキングに行った時、一人で友達を待っていると、足元をネコよりもっと大きなウサギが通りすぎ、自分は日本のアリスだという体験をしたと図書館の児童読書相談コーナー担当の「わたし」に語りだす。このように、「わたし」の所には、さまざまな利用者が自分の不思議な体験を話しにやって来る。どの打ち明け話も少し不思議で背筋が凍ってしまう。

## 『日曜日／蜻蛉 生きものと子どもの小品集』

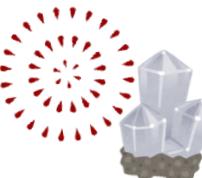
志賀 直哉／著 中央公論新社 (2021年)

この小説は、子どもに関する作品と、生きものに関する作品を1冊にまとめた短編集です。「兎」は〈今、兎を一匹飼っている〉からはじまるエッセイで、兎を入れる函をどのような大きさで作ったのか、どのような鳴き声か、兎の様々な姿態が詳細に記されています。他の作品でも、蜻蛉、家守、蜥蜴、百舌など、小さな生きものの細かい仕草が写実的に書かれています。1つ1つは短い小説ですが、志賀直哉の代表作である「小僧の神様」「城の崎にて」も収録されていて、しっかりと読みごたえがあります。



## 『旅するウサギ』

竹下 文子／著 大庭 賢哉／絵  
小峰書店 (2010年)



まつりの日の小さな村、フェリーで行き来できる小さな2つの島、水晶がとれる浜など、あちこちいろいろな場所を旅するウサギの少し不思議な物語です。あまりおしゃべりではないウサギから、旅の思い出や、旅を通して感じしたことなどをこっそりと少しずつ教えてもらっている気分になれる1冊です。旅の思い出の一瞬を切り取ったような、可愛らしい挿絵にも注目です。ウサギが教えてくれた数々の思い出の中から、ぜひお気に入りの旅のエピソードを探してみてください。

## 『ピーターラビットの仲間たち 写真集』

菜十木 ゆき／写真  
辰巳出版 (2018年)



この写真集は、ピーターラビットのことが大好きな著者が、ピーターラビットに登場する動物たちを本国イギリスの地で撮った写真で構成されています。うさぎはもちろん、リスや鳥、馬などの写真も登場します。イギリスの大自然でのびのびと暮らす彼らの日常風景を覗くことができます。また、ピーターラビットの絵本の挿絵もところどころにちりばめられており、絵本の中の彼らと現実の彼らを比べることができます。動物たちの愛くるしい表情を眺めて癒されてください。